

り候、尙本月出品中には、課題の土瓶の寫生四五葉ありて面白
き研究をなし候。何を申すも田舎の事とて、會員たる吾々として
只水彩畫に趣味を有すると申す迄なれば、一般世間には繪を見
て呉れる人もなき様の有様に御座候、尤も下手な故とは承知致
し居り候へ共。

併し 吾々の小なる會の力も意外の所に現出致候、其は、當町
より二里餘南なる、上松(駒ヶ根村大字)小學校長並に一名の教
員が、吾々の作品を見て水彩畫の趣味を解し、新に研究せむと
て、材料を得べく人を介して照會し來り候、此有様にては、數
年ならずして同好者の數多くなりて、山紫水明の當地に講習會
を御願ひ申し得べきかと存じ居り候。

先づは遷喬會の報告を兼ねて當地近況御報告申上候。

七月十日

遷喬會幹事川崎本雄

日本水彩畫會新會友

静岡縣安倍郡千代田村沓谷	深澤	信
滋賀縣坂田郡柏原村二二四	松浦	久雄
神田區今川小路一ノ六小笠	近藤	只三
原利貞方	柿田	貞藏
秋田縣大曲町	川幡	正光
鹿兒島縣鹿兒島郡谷山村字		

寄書

其一時

鹿兒島川邊 みい坊 投

海岸に出た時は最早日は西に落ちて東の空は薄桃色にやけて
居た、一人の海老茶袴が暮るるも知らないで出入する白帆を寫
して居る、彼は今畫より外に何物も思ふ事はないのだ、自然に
全化されて居るんだ、其やさしい姿美しい景色―櫻島の悠々と
して偉大なると、千歳ふる磯馴松の形面白きと、實に善いコン
トラストだ。

早くも三脚を据へてのがさじとあせるうちに、それと氣づい
た彼は、すぐ三脚をたゝんで、紅くした顔はづかし相に片袖に
かくして、沖邊へ振りむいてしまつた、段々潮が満ちて來て、其
足のあと迄打ち消してしまつた頃には、もう四方は黒幕にとぎ
されて、東の峰の頂がほの白かつた、急に海風が身にしみて來た

木下蔭

藤澤 コスモス

光榮ある藝術の神は其祭壇の前に跪づける若き才ある子に向
つて多大の祝福を下すや必せり。

綠したゝる木の蔭に三脚をすへて袖を涼風に拂はせつゝ自
然を寫す吾に腦みの心なし。

清澄の氣に浴しつゝスケッチする時の吾に安らげき慰あり。

* * *